

れきし ふんかざい  
かみのやま歴史・文化財さんぽ

第6号（平成30年2月）

おうちょうがんねんだいにちいたび  
応長元年大日板碑

まえまるもり ぼうやしき  
(山元 前丸森 坊屋敷)

ミドリ「国道348号線ぞいの山元ね。」  
あゆむ「前丸森<sup>まえまるもり</sup>って、ここを<sup>いり</sup>入って行くの？」  
文じい「そう。登<sup>のぼ</sup>っていくと集落<sup>しゅうらく</sup>がある。」  
ふみお「地図で見ると、前丸森、入丸森、中ノ森<sup>いりまるもり</sup>など、森のついた地名がある。」  
文じい「さあ、ついたぞ。この家は横戸市長のご実家じゃ。」  
ミドリ「えっ、そうなの？」  
文じい「うむ。今日調べるものは横戸市長<sup>しよゆう</sup>の所有になっておるもので、ここからは歩いて登って行こう。」  
あゆむ「えっ、登るの？ 遠くない？」  
文じい「ま、結構<sup>けつこう</sup>あるが、その方がありがたみも感じるじゃろう。」  
ミドリ「“坊屋敷”と聞いたけど、どの辺？」  
文じい「このあたりじゃな。昔、僧坊、つまり坊さんたちのお堂じゃな、それがあったところというので、坊屋敷。そして、いちばん奥<sup>おく</sup>のだい（台）という所に、その板碑<sup>いたび</sup>が建<sup>た</sup>っておる。」  
ふみお「あっ、あれだ！立派<sup>りっぱ</sup>な祠<sup>ほくら</sup>の中にある。」



あゆむ「おう、かっこいいね！」  
ミドリ「あら、なんだか少し読めそうだわ！  
○長元年 八月二十九日・・・？」

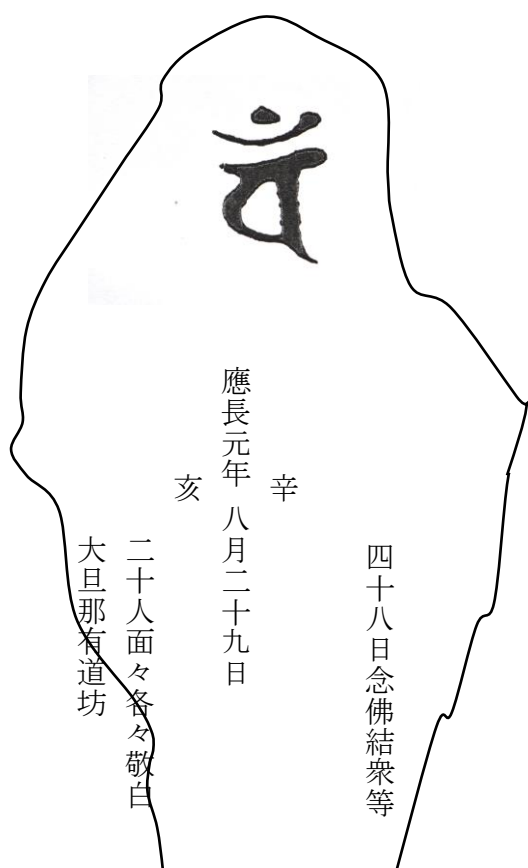


ふみお「四十八日念佛<sup>ねんぶつ</sup>〇衆<sup>しゆう</sup>？ あと、二十人面<sup>おおだんな</sup>・大旦那<sup>おおだんな</sup>・・・？」  
あゆむ「それから、上の大きな記号、ええと、なんて言ったっけ。」  
ミドリ「種子<sup>しゆじ</sup>だったよね。」  
文じい「そう。この種子は、“バン” じゃ。」  
ミドリ「ばん？それは何<sup>なに</sup>という仏様<sup>ほとけさま</sup>なの？」  
文じい「大日如来<sup>だいにちによらい</sup>じゃ。」  
ふみお「あれ、この前の湯町の板碑も同じ大日如来と言ったと思うけど、確か“アーク”と言わなかった？」  
文じい「ほう、よく覚えておったの。そう、同じ大日如来<sup>だいにちによらい</sup>じゃが、向こうのは“胎蔵界<sup>たいそうかい</sup>大日如来<sup>だいにちによらい</sup>” じゃ。」  
ミドリ「えっ、“お大日様<sup>だいにちさま</sup>” でも、ちがうの？」  
文じい「うむ、こちらの方は、“金剛界<sup>こんごうかい</sup>大日如来<sup>だいにちによらい</sup>” という。」  
あゆむ「ふーん、なんだかむずかしいんだね？」

文じい「胎蔵<sup>たいざう</sup>というのは、赤ちゃんがお母さんのおなかの中で成長していく不思議な力にたとえて、すばらしい力と可能性を持っていることを示しておる。金剛<sup>こんごう</sup>は金属でもっとも硬いが、如来様の知徳<sup>ちとく</sup>は金剛のようにとても硬くて、あらゆる悪い心を打ち破る力を持っていることを示しているということなんだそうじゃ。」

ミドリ「なるほどね。ところで、他の字は？」

文じい「次のように彫<sup>ほ</sup>ってあるらしい。」



あゆむ「左下の欠けたところは、どうしてわかったの？」

文じい「『山元村誌』というもの<sup>やまもとそんし</sup>に書いてあったというんじゃが、今はそれが不明なのでよくわからない。」

ミドリ「それにしても、湯町の板碑よりずっとよく見えるわね。」

文じい「実は、この板碑は田畑の中に埋<sup>う</sup>まっていたのが、後に発見されてここに<sup>うつ</sup>移し建てられたので、それほどすり減<sup>へ</sup>ったり傷<sup>きず</sup>つ

いたりしなかったようだ。」

ミドリ「それで、意味はどういうこと？」

ふみお「48日間念仏をした。結衆<sup>けつしゆう</sup>というのは？」

文じい「“講”<sup>こう</sup>ともいうが、簡単<sup>かんたん</sup>に言うと集まり、念仏する集団<sup>ねんぶつ</sup>じゃ。願いをかける念仏修行<sup>しゆぎやう</sup>を一日一願<sup>いちにちいちがん</sup>として、四十八日間行う。それで四十八願となる。」

ミドリ「應長元年<sup>おうちやうげんねん</sup>とは？」

ふみお「應長は年号で、応長でもいいよね。元年は1年ということだよ。」

文じい「その通りじゃ。西暦<sup>せいれき</sup>では、1311年。」

ミドリ「あら、湯町の板碑より古いわ。」

ふみお「やっぱり鎌倉時代<sup>かまくらじだい</sup>？」

文じい「その通りじゃ。上山ではもちろん一番古いが、山形県内でも古いものじゃ。」

ふみお「辛・亥<sup>かのと い え と</sup>は干支<sup>えと</sup>だね。亥はイノシシだ。」

あゆむ「二十人の方々の集まりが、どうしたの？」

文じい「有道坊<sup>ゆうどうぼう</sup>という大旦那の僧が中心となって念仏し、これを建てたのだろう。」

ミドリ「パワースポットだね、ここは！」

文じい「ふむ。この奥には、滝の山の奥<sup>たきのおく</sup>の院<sup>いん</sup>があったと言われてきた。そして、そこに西行<sup>さいぎやう</sup>という有名な坊さんが訪<sup>おとず</sup>れて、歌を詠<sup>よ</sup>んだと言われてきたが、滝の山は、東の竜山<sup>りゅうざん</sup>のことだという説もあり、さらに調査研究<sup>ちやうさけんきゆう</sup>が必要<sup>ひつやう</sup>じゃの。」

ふみお「ますますおもしろくなってきたな！」

文じい「レプリカが上山城にもある。ゆっくり調べるといい。」

